

目次

『源氏物語』前史 ——登場人物年齢一覧作成の可能性——	田坂憲二	3
『源氏物語』の時代構造	秋澤 亙	27
桐壺帝をめぐる「風景」 ——『源氏物語』ひとつの状況として——	横井 孝	57
一世源氏としての光源氏の結婚 ——『河海抄』の注記から見えてくるもの——	栗山元子	85
女御の父の地位 ——『源氏物語』の女御観——	松岡智之	111

「輝く日の宮」巻の存否 ——欠巻Xの発表時期——	斎藤正昭	139
少女巻の朱雀院行幸	浅尾広良	163
六条院と蓬萊 ——庭園と漢詩をめぐって——	袴田光康	189
『源氏物語』朱雀帝の承香殿女御の死	春日美穂	219
〈新たな姫君〉としての宇治中の君	辻和良	243
宇治十帖の執筆契機 ——繰り返される意図——	久下裕利	263
『源氏物語』の方法的特質 ——『河海抄』「准拠」を手がかりに——	廣田 收	311
大島本『源氏物語』本文注釈学と音楽史	上原作和	335
平安時代の親王任官について	安田政彦	365
あとがき	田坂憲二	395
執筆者紹介		403

あとがき

本書の原稿集約が最終段階にさしかかっていた二〇一四年一二月は、清水好子という稀有な研究者が亡くなってからちょうど十年の歳月が経過したこととなった。この年には、没後十年という区切りの年に合わせるように、山本登朗・清水婦久子・田中登という最適の編者を得て『清水好子論文集』全三巻（武蔵野書院）が刊行されたのだが、それはこの研究者の仕事がすぐれて今日的な意味を持ち続けていることを示している。本論集においても、秋澤互、横井孝、栗山元子、廣田收等々が、まるで競うかのようにそれぞれの論文の冒頭に清水好子を引用することから筆を起していることは、紛れもなくそのことの証左である。その意味で、本論集の本当の編者は清水好子であると言っても良いかもしれない。以下、清水に代表される優れた先学の論考と切り結ぶ、本書所収の各論を簡単に紹介する。

秋澤互「『源氏物語』の時代構造」は、この物語における桐壺・朱雀・冷泉・今上の御代が、現実の醍醐天皇・保明親王・朱雀天皇・村上天皇の時代とほぼ合致することを述べ、このように「現実の歴史との一体化が志された時間軸」と、それとは対照的に「歴史上に実在したそれらとの異化が目指されていた」ことに、この物語の秘密があるとする。いわば、歴史その儘と歴史離れ、を図式的に当てはめた感がないでもないが、そうした批判を強引に封じ込めるだけの状況証拠の列挙がなされる、力感あふれた論考である。『源氏物語』と史実を平行した形で年表にまとめたことも斬新なアイディアである。また『源氏物語』の朱雀朝を、夭折した保明親王（とその子の慶頼王）の「幻の六

十一代」の御代と位置づけたのは実に面白い見解である。

横井孝「桐壺帝をめぐる「風景」——『源氏物語』のひとつの状況として——」は、与謝野晶子の『新訳源氏物語』に見られる「陛下は二十になるやならずやの青年である」という独自の文章を突破口として、桐壺朝の状況、特に桐壺更衣をめぐる帝の対応を分析する。口語訳の中に埋もれていたこの行文に最初に着目したのは、清水好子の師でもある玉上琢彌であった。玉上の後を襲った藤本勝義や田坂の論考と、横井孝の本論との間には、講演ではあるが学会誌『中古文学』九二号に掲載された神野藤昭夫の「始発期の近代国文学と与謝野晶子の『源氏物語』訳業」もあり、近時、相次いでこの問題が取り上げられていることから、与謝野晶子が桐壺院の年齢を推定することでこの物語に肉薄しようとしたことがいかに重要であるかが認識されよう。横井は先行研究を的確に整理し、史実の検討を踏まえた上で、桐壺帝が桐壺更衣への対応において、極めて危機的な状況にあったことを見事に浮き彫りにしてみせる。

栗山元子「一世源氏としての光源氏の結婚——『河海抄』の注記から見えてくるもの——」は、表題にもある一世の源氏が執政の大臣に婿取られることは親王の場合と比べて稀少であり、能力を評価されていたことで、『河海抄』が高明を光源氏の準拠とすることに着目する。この間の資料操作は極めて緻密で鮮やかである。その一方で『河海抄』のあげる『うつほ物語』の源正頼に関連する記述をも視野に捉え、近時、栗山たちが精力的に調査している『光源氏物語抄』との関連も踏まえた上で、『河海抄』がどのような注釈を志向していたということまで論述する。古注釈書の記事から出発しながらも、最終的にその注釈書を相対化する視点をも確立するに至る、極めてバランスの取れた好論文である。

松岡智之「女御の父の地位——『源氏物語』の女御観——」は、『源氏物語』を講義などで取り上げる時に誰もが漠然と疑問を感じていた、大臣以上の娘が女御で大納言以下の娘が更衣という、一般的な注釈書に見られる説明を根本から問い直したものの。嵯峨・淳和朝、仁明・宇多朝、醍醐・村上朝に大別して、各天皇の女御の父親について網羅的に調査を行う。禁欲的なまでに抑制のきいた好論で、導き出された結論は極めて信頼度が高い。したがって、従来の注釈の論拠の一つであった明石尼君の発言なども含めて、「身分差を物語展開の軸とする『源氏物語』の創作原理のもとらす現実からの離陸」という結論は説得力をもつ。それにしても本論を読むと、桐壺帝の時代を醍醐朝と重ねる時代設定の意味を痛感させられるのである。

斎藤正昭「『輝く日の宮』巻の存否——欠巻Xの発表時期——」は、風巻景次郎・高橋和夫らが考究した重要な問題を、改めてじっくりと取り上げる。失われた欠巻Xの内容は、朝顔姫君、筑紫五節、花散里らの内容を含むものとする結論は穩当である。斎藤の持論でもある、桃園式部卿宮の家系と代明親王の家系を結びつける点はとりわけ魅力的である。斎藤の著書のうち、『源氏物語 成立研究』（笠間書院、二〇〇一年）『紫式部伝』（笠間書院、二〇〇五年）らと併読することによって著者の立場は一層鮮明になるので、参考されることを編者としても希望する。

浅尾広良「少女巻の朱雀院行幸」は、物語三四年二月の朱雀院への行幸の持つ問題を鋭く剔抉する。歴史上の朝観行幸の用例を精査し、「王権の分裂回避」「孝敬を尽くす儀礼」「皇統の一体の確認」などの要素を厳密に抽出する。そして濡標以降の、冷泉王朝における旧体制（朱雀朝以来の左右大臣）の一定の影響力や、承香殿腹の東宮の存在などとのバランスを取りながら摂政太政大臣や光源氏側は政権運営を行わなければならず、その中で、絵合に代表される聖代演出、中宮立后による冷泉帝の正統化の流れという流動的な政治状況の中に、この朱雀院行幸を置いてみることによって何が見えてくるのかを明らかにする。それは「王権分裂を回避する朝観行幸」として最終的に位置づけられるのであるが、史実の解析と物語の分析が見事に調和していて、「史実の回路」の論集にふさわしい鮮やかな論理展開を見せてくれる。「冷泉帝と光源氏の赤色袍」の意味するものの位置づけも説得力に富む。

袴田光康「六条院と蓬萊——庭園と漢詩をめぐって——」は、主題から予想されるごとく、胡蝶巻の春の町の記述から、六条院の内実に切り込む。田中隆昭、小林正明らの指摘のある重要な視点であるが、袴田は改めて日本の漢詩文における「蓬萊」の用例に立ち戻り、悉皆調査に近い形で比喩的用法の変遷を見事に跡づけて見せた。そして蓬萊に代表される神仙世界を模した風景の賛美が、庭園の所有者や詩宴の主催者への賛美につながっていることを指摘する。特に『扶桑集』『本朝麗藻』以下の一条朝に近い時代の用例では「内裏・後院」「殿上」を示唆する派生的な用例が、本来的な使用方法数を上回ることを指摘したことは重要である。こうした緻密な作業の上に立ち、胡蝶巻の「亀の上の山」の和歌が、六条院の両義性、秋好中宮を擁立する摂関家的な立場と、冷泉帝の実父という隠された立場ともつながることを指摘する。緻密な用例の積み重ねを作品論へと見事につないで見せた好論である。

『源氏物語』朱雀帝の承香殿女御の死」は、二十代の仕事を『源氏物語の帝 人物と表現の連関』（おうふう、二〇〇九年）として見事にまとめ上げた春日美穂らしい手堅い論考である。『源氏物語』に登場する三人の承香殿女御を俯瞰した上で、朱雀院の承香殿女御が今上の即位を見ずになくなったことの意味を解析する。歴史上の皇太后位を追贈された女性と比べてみると、朱雀院の承香殿女御の特異性が浮かび上がってくることを指摘した上で、承香殿女御の死によって「今上帝の御世」が「国母不在」となり、そのことが第二部から第三部にかけて物語を大きく規定することを明らかにする。「国母不在」という観点は、前述した浅尾論文が取り上げた「皇統の家父長的権限を持つ上皇が宮外の別の場所」に住することの問題と突き合わせることによって、一層大きな意味を持つてくると思われる。

宇治十帖を直接取り扱ったものは、辻和良「〈新たな姫君〉としての宇治中の君」と久下裕利「宇治十帖の執筆契機——繰り返される意図——」の二編である。まったく対照的なアプローチであるが、ともに宇治十帖の根幹に関わる問題をあぶり出している。

辻論文は「中の君」「中の宮」の呼称の揺れを切り口に、「中の宮」の呼称は、「自己判断する」姫君としての特殊な位置付けを表出している」とする。それはこれまでの物語内の姫君たちが持ち合わせていないもので、「他の男たちを巻き込んで示威行動をおこそうとする」と読み解く。テキストの徹底的な読みと拘泥することによってのみ生み出される斬新な視点である。たとえば、中の君・若宮・匂宮・六の君の關係が、創作が史実を先取りした形ではあるが、延子・敦貞親王・小一条院・寛子と相似形であることを論じることなども可能であるのだが、そうした方向に広げることを敢えて避けることによって、鋭い論理構成を可能としている。久下論文は、辻論文とは正反対のスタイルを取る。寛弘六年の後中書王具平親王の不可解な死と、具平親王女隆姫と頼通との婚儀が『御堂関白記』に記載されない不自然さを、宇治十帖の構成や執筆契機と結びつけた好論である。その一方で副題「——繰り返される意図——」とある如く、空蟬や末摘花の物語と宇治の物語に代表される物語内の照応も浮き彫りにする。久下論文の懐の深さは、紫式部と具平親王、紫式部と道長・彰子の關係を中核に据えつつ、史書・日記・家集・古注釈書に幅広く目配りをして、快刀乱麻の如く複雑な方程式を解きほぐしていく点にある。本論集中最長の論文であるが、視野の広さを支えるためにこれだけの紙幅を必要としたと言えよう。

廣田收「『源氏物語』の方法的特質——『河海抄』『准拠』を手がかりに——」は『河海抄』の「准拠」の概念という、この注釈書の本質を考える上では避けては通れぬ問題に肉薄する。当然先行研究の累積はあるが、それらを巧みに俯瞰した上で、「料簡」の記述と「准拠」の用例に再検討を加えた好論。廣田論を根底で支えているのは、冒頭に記される、史実を「純粹客観的」事実と捉えることに對する違和の表明である。「正史にしても日記にしても」「言葉によって捉えられたもの」であり「言葉は認識であり、思考であり、表現である」という文言は万金の重みを持つ。私家集の記述などを歌人の伝記研究に無批判に使用していないか、稿者などは襟を正して危座して廣田の言を受け止めた。

上原作和「大島本『源氏物語』本文注釈学と音楽史」では、論文冒頭から紅葉賀巻朱雀院行幸の場面の青海波に関する表現で、河内本諸本に共通する「輪台」の本文について重要な指摘がある。この表現を欠く青表紙本は定家の「恣意的な」「改訂」と見るのである。秀歌選や勅撰集においては和歌表現を改訂することの少なくない定家が、こと『源氏物語』に関しては（たとえそれが河内本の方法と比べて相対的にというカッコつきであっても）、特定の古本を尊重して書写しているという見方に対しての重要な異議申し立てである。個別の指摘に関しても、「文君といひけむ昔の人」（紅葉賀巻）「むまやのおさにくしとらする」（須磨巻）「五六のはら」（若菜下巻）など、本文対立があったり解釈困難な箇所にも鋭く切り込んでいる。上原も再評価する『光源氏物語本事』の行文は改めて注目される必要がある。

安田政彦「平安時代の親王任官について」は『平安時代皇親の研究』（吉川弘文館、一九九八年）以来この方面の研究の先頭を走っている著者が、宇多、醍醐、陽成、村上、一条・三条皇子の任官歴を悉皆調査したもの。各天皇群ごとの分析に加えて、官職ごとの分析を組み合わせており、今後の基礎資料としても極めて重要な意味を持つ。個別の分析についても、兵部卿が、村上の皇子たちが元服から間を置かず任官されることが多いためその重みが失われたこと、特に八宮永平親王の任官がその地位を軽くしたことの指摘は重要である。官職の比重は一定ではなく、常に相対的であるからである。花山朝以降も、関白を返上した藤原頼忠が太政大臣位に座り、関白兼家の下風に立つような形となったことが太政大臣の地位を低下させたことなどが想起されよう。もちろん兵部卿の地位が低下したと言っても、それは史実におけることであって、匂兵部卿宮の造形以降、後期物語や擬古物語で兵部卿が独自の色彩で描出されることはまた別の問題である。

冒頭に清水好子の名前を出すことから書き始めたが、田坂の「『源氏物語』前史——登場人物年齢一覧作成の可能性——」も、清水が梗概執筆という形で参加している『源氏物語事典』（東京堂、一九六〇年、池田亀鑑編）所収の「主要人物官位・身分年齢一覧」（稲賀敬二作成）と同様のものが、物語の前史においても成り立つのではないかという見通しの下に書いたものである。

ここで特筆大書しておきたいことは、共同編者として稿者は名前を連ねているが、企画の骨子から、執筆者の選定、入稿に至るまでの執筆者とのやりとり、原稿の排列・全体の構成の確定から出版社との交渉などすべて久下裕利の力によるということである。栗山・廣田論文等との関連から『河海抄』の書影をカバージュケットに決定したこともここに含めて良いであろう。稿者はこの間何をしていたかという点、数名の執筆候補者を追加したことくらいである。それも稿者が当然推薦するであろう最適の候補者を、あえて数名残してしてくれたとおぼしい。そうした下準備を完璧に行った後で、「あとがき」の執筆を稿者に求めてきたのである。それぐらいは手伝うべきであると強要する姿勢を見せるようで、その実、これらの優れた論文群を最初に、じっくりと読むことのできる機会を譲ってくれたのである。稿者の非力ゆえ、卓越した諸氏の論文の良さを十二分に伝えることができなかったのではないかという恐れと、やはり久下こそが、この解題の執筆者として最適であったという思いを抱くのである。

最後に、多忙な中にもかかわらず力作論文をお寄せいただいた執筆者各位、編集の仕事の大変な部分をすべて担った久下裕利氏、そして、人文学への逆風の中こうした論文集の刊行にご理解を得た武蔵野書院社主前田智彦氏に、厚く御礼を申し上げます。

二〇一五年 三月三十日

